再建か廃業か 揺らぐ思い

復興 道半ば 5 仮設商店の岐路

震災5年 岩手・大槌からの報告

諦めるにしても心の準備の時間欲しい

「コ」の字に並ぶ長屋のようなプレハブが3棟。東日本大震災の津波に襲われ、廃校となった岩手県大槌町立大槌北小学校の校庭に「福幸(ふっこう)きらり商店街」はある。約40の被災事業者らでつくる仮設商店街だ。

岩手、福島、宮城の被災3県のご当地グルメを集めた9回目の「復興グルメF―1大会」が2015年4月、ここで初めて開かれた。国際医療ボランティアAMDA（岡山市）が開催を軌道に乗せ、現在は協賛団体として支える復興支援イベントだ。詰め掛けたのは町内外の3千人。誘致に尽くした事業者らは充実感を漂わせたという。

「被災地の店がどんな状況に置かれているか、みんなに知ってほしかった。私たちの商店街が存在した証しも残しておきたかった」。商店街の会長を務める学生服販売業、山﨑繁さん(67)が振り返る。

11年末のオープンから4年余り。仮設商店街は今、大きな選択を迫られつつある。

◇　◇

飲食店や美容室、自転車店にレンタルビデオ店と多様な業態の店舗が並んでいる。2月初めの平日の夕方、福幸きらり商店街にはお年寄りや会社員、学生らの姿がぽつぽつあった。

福幸きらり商店街が誘致し、大槌町で開かれた復興グルメF―1大会。町内外の3000人でにぎわい、被災地にひとときの笑顔が戻った＝2015年4月12日

「一時期、インターネットで話題になって観光客がたくさん訪れた。今は近隣の住民が主なお客さん」と山﨑さん。

1950年創業の呉服店がルーツの学生服販売店を町内で営んでいた。震災で母親と妻が行方不明となり、店舗も被災。気力を失い、廃業を考えた。

母親と妻を捜し歩いた避難所や遺体安置所で、毛布にくるまって震える子どもたちを見た。寒さをしのぐ服を用立ててやりたいと、かつての取引先を訪ねるうち、心が動いた。大槌の子どもたちに服を着させてやる義務が自分にはある―。再起を決め、仮設商店街に入居した。

仮設商店街は被災事業者らのために独立行政法人が整備し、テナント料は無料だ。店の売り上げは震災前の3分の1から5分の1に減ったが、それでも経営は成り立っている。

ただ、仮設商店街はいずれ撤去される。撤去費用について国は資金補助の期限を設けているため、この期限に合わせてどの店も退去を迫られる見通しだ。自前の店舗を構えるには多額の出費が必要となる。

「人がどんどん減っているこのまちで売り上げアップなんて期待できない。仮設でしか商売は成り立ちそうにない」

資金に余裕があり、退去後に店舗を再建する事業者がいる。一方で半数は廃業を考え始めていると、山﨑さんはみている。

◇　◇

＜仮設店舗　期限を延長　撤去費国補助　19年3月末まで＞

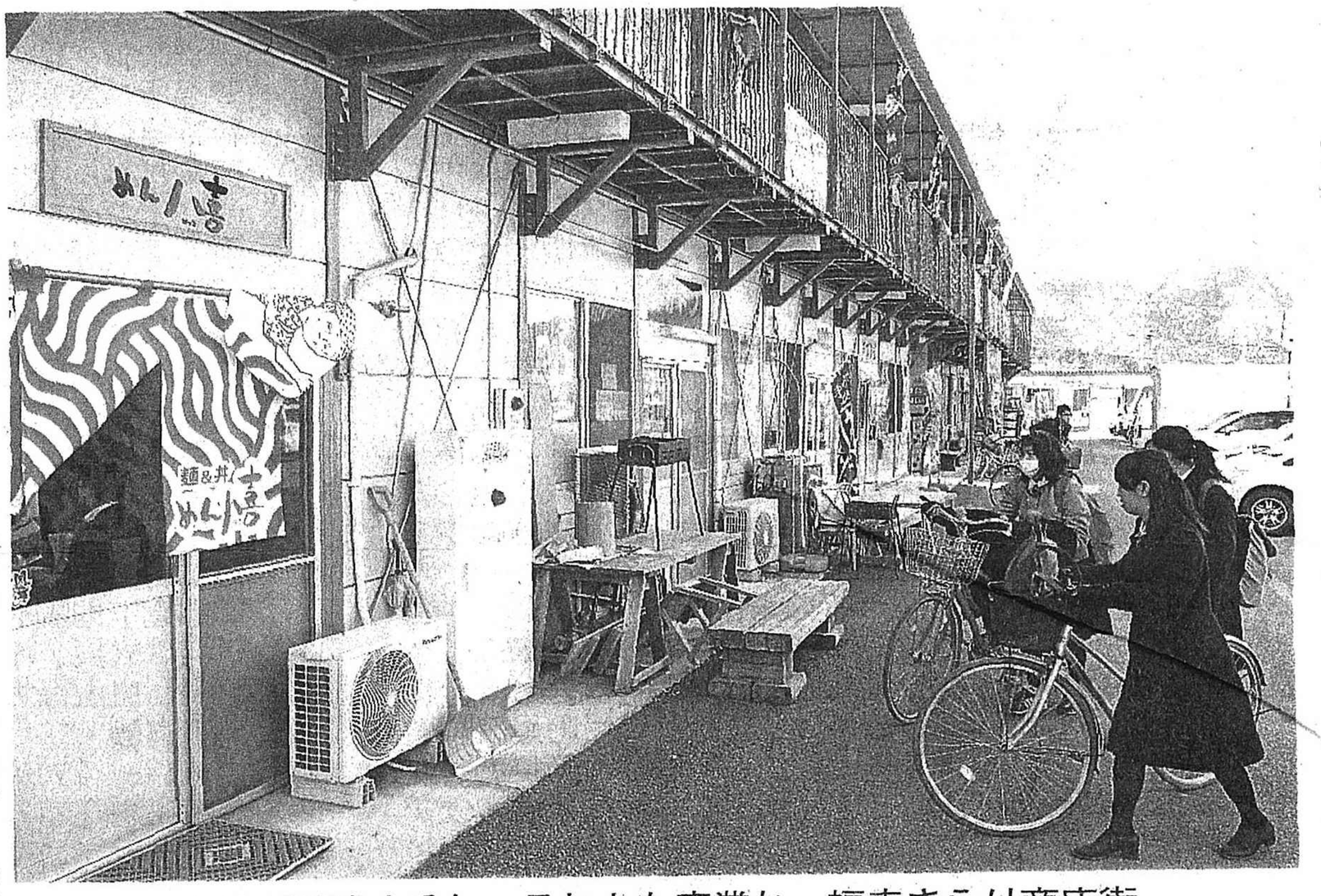
こんな見出しのニュースが2月6日付地元紙朝刊1面トップを飾った。「完成から5年」としていた撤去費用の国補助の期限が最長2年半延長される国の方針を報じていた。

「うれしいニュース。私たちの現状を少しは分かってもらえたのかも」

安どの表情を浮かべた山﨑さんだが、まだ「短い」と思う。本当は「完成から10年」ぐらいまで期限を延ばしてもらいたい。

「店舗の再建か、廃業か。諦めるにしても心の準備の時間が欲しい」

揺らぐ思いが口をついた。



店舗を再建するか、それとも廃業か。福幸きらり商店街の各事業者は大きな選択を迫られつつある＝2月5日